

県大会出場に寄せて

長岡高等学校
若松 ゆずは



長岡高校

クロツカセペンバー

新津工業高等学校
村越 翔太



新津工業高校

県大会に出場して

長岡向陵高校演劇部



長岡向陵高校

県大会での学び

万代高等学校
関谷 楓華



万代高校

この作品に出合っ

六日町高等学校
並木 瞳



六日町高校

夢のようなひと時

三条高等学校
難波 心



三条高校

大会出場生徒の声

今年大会では2021年全国最優秀賞の作品「COMO」を上演させて頂きました。この作品は、多様性への期待と不安に揺れる現代社会と、その中で協調性が求められる学校生活の狭間で生きる高校生の「生きにくさ」について描かれています。「周りに合わせて生活したい、しなければ」という感情も、「自分らしく生きたい」という感情も、私たちは誰しもが日々感じながら生きています。作中に出てくる悩みを抱えている当事者が今私たちが生きている世界の中にいます。さらに、2021年当時から世界はさらに大きく動いていて、それを受け止めて支居つくりをしていかなければ今自分たちが上演する意味がないという思いもありました。だからこそ様々なことに配慮して舞台を上げました。浮き沈みやマナーをはじめ登場人物の心情を表現しようと舞台についてもみんなで考え、無言や照明などを効果的に使うことを考えました。大会結果としては、私たちが伝えたいことを伝えることができた、悔しい思いもあります。しかし、この大会を通して演劇の楽しさ、そして表現することの楽しさを改めて感じる事ができました。この思いはきっと後輩たちにつながっていくことでしょう。上演に携わって下さった主催の方に感謝すると共に長岡向陵演劇部にちなみ「COMO」が多くの人の心に響いていくことを願っています。

顧問の先生が持っていた台本「黒髪赤子」。練習を進めて気づいたのは、女子3人・男子2人の物語、僕たちは男子4人なんだけども。試行錯誤をくり返しても、これだと思える形にたどり着かず、不安だらけのまま迎えることになった地区大会。スタッフも役者も全力で挑んでみた結果は、なんと県大会へ。とても嬉しかったのですが、もう2ヶ月この作品と向き合い、もつとちゃんと仕上げなければいけないというプレッシャーも大きかったです。主人公の狂気を表現するシーンの正解をあらためて探すこと、これが難しく悩ましく、一瞬で大会の前日となりました。が、その時間で得たものは多く、県大会では上手にドラマでできたと思います。無人のドアが突然開くエンディングのシーンでは、袖から引く張るテグスが途切れてドアの勢いがないというハプニングに、それが逆に良い効果を生んで、審査員の方々にそれは好評をいただきました。舞台の神様はいるようです。関東大会への壁は高く、本当にあと一歩のところで進むことができませんでした。この悔しさこそまで行けたという自信を持って、来年こそは関東まで行きます！これからも部員みんなで頑張ります！

私達は「あおにとける」という作品を上演しました。旧校舎の屋上で出会った二人の女子高生、葵と風花の物語です。生き生きと人物を演じることや、初対面の二人が友達になるまでの心の開き具合や距離感などを大切にしました。特にラストは互いに感情を爆発させているところに苦しみましたが、葵と風花を抱えて、説得力のある演技が繋がったと思います。また、屋上で舞台ということも、東方の1年生を中心に描き作りしました。晴や古い感じを出すため、細かい部分までこだわりました。感想シートにも欄に関する素敵な言葉があったので嬉しかったです。今回は万代高校さんと同じ演目だったので、とても刺激を受けました。台本に書いてあるセリフは同じでも、解釈によって言い方や舞台全体の印象が変わってくるということがわかり、勉強になりました。県大会でいただいた感想や、自分達が感じたことを、今後の活動に活かしていきたいと思っています。

私達万代高校は県大会で「あおにとける」という作品を上演しました。この作品の登場人物である二人の女子高生、葵と風花は自殺志願者という設定で、この二人の気持ちを完全に理解することはとても難しかったです。特に風花が中浜葵と「土田葵」という二人の葵に対して話をするところは風花の気持ちを読み取ることが難しく、今の私には演じることができないと感じたこともありました。本番でも自分の気持ちの弱さが出てしまったところがあり、とても悔しかったです。それでも自分たちの今ある力を出し切り、県大会を乗り越えることができました。他校の作品は素晴らしいものばかりで学びました。たくさんありがとうございました。県大会を通して私は自分の演技がまだまだ未熟だと改めて思い知らされました。もっと自分の演技に磨きをかけ、最高の舞台を観客の皆さんに届けたいと強く思いました。最後に、県大会を運営してくださった関係者の皆さん、開場のスタッフの方々、審査員の皆さん、観客の皆さん、私たちを支えてくださり本当にありがとうございました。

私は県大会出場が決まった時、嬉しさの中に、またこの作品に向き合わなければいけないという不安がありました。この作品は自殺がテーマになっており、夏休みから始まった稽古は厳しいだけでなく、部活後毎日コーラを飲まれました。また二人で劇を成立させ、互いにバランスをとっていくことが非常に難しく大変でした。地区大会は劇を成立させることに必死でした。そのため県大会に向けては、改善点も多く、県大会の発表までには、弟のキヤフ、セリフ、照明などを大きく変える必要がありました。一番苦労したのは、劇中劇の場面とリアルな場面の違いを演じ分けることでした。その場面に照明が切り変わるのに合わせて、役者も瞬時に切り変わらなければならなかったのですが、演技がついていけませんでした。また乱闘シーンでは、二人の芝居から男女二人の芝居に作りかえたので、弟役が全力で暴れられたい制約の中で、激しさを表現することが難しかったです。感想カードで「藤原の話」で楽しんでくれたお客さんが多かったことを知り、嬉しかったです。

三条高校演劇部として久々の県大会、分らない事だらけで苦労は多かったですが、県大会のステージに立てるという一心を離れながら練習に励みました。私たちが選んだ作品は「ドッペル・クラウン」とおもちゃ箱です。この作品をやりたいと思ったのは実は一年以上前、独特な夢の世界観で繰り上げられる愛の物語に惹かれて選びました。ただ、この作品の登場人物は魅力だけでなく暗い面も多く役ばかり、役者共々表現しきるのは苦労しました。そんな個性的な役を演じる上で大切にしたのは、登場人物の心です。僕の演じたベドロなら、素っ頓狂な行動に眠る娘への愛、それを僕自身の胸に宿して表現しました。その甲斐あってか、多くの人に感動を届けることができ、とても嬉しかったです。惜しくも大きな結果は得られませんでした。が、仲間と共に精一杯大好きな作品を演技できて悔いはありません。最高の舞台を演じたいと思っています！

『春の全国大会』が新潟県で開催！
令和3年3月20～22日
第1回全国高等学校演劇研究大会
りゅうぎょう
新潟市長芸術文化会館